考古学用語　解説

普段聞きなれない考古学の用語を、解説していきます。

■ 掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）

柱の根本（ねもと）を直接地面に埋（う）めて建てた建物

高床式倉庫（たかゆかしきそうこ）などが含まれます

■ 竪穴建物跡（たてあなたてものあと）

教科書には「竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）もしくは竪穴住居」とあります

地面を掘（ほ）りくぼめて床をつくり出し、上に屋根をかけた半地下式（はんちかしき）の建物

■ 遺構（いこう）

むかしの人々が地面に残した建物跡や墓跡（はかあと）などの痕跡（こんせき）

■ 土坑（どこう）

むかしの人々が地面に掘った大型の穴のことで、貯蔵（ちょぞう）のための穴やごみ捨て穴など

■ ピット

土坑（どこう）よりも小さな穴のことで、建物の柱穴（ちゅうけつ）なども含まれます

■ 甕棺墓（かめかんぼ）

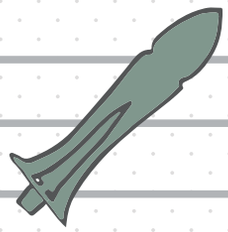
地面に穴を掘り、そこに大きな甕（かめ）や壺（つぼ）をおいて、亡くなったひとを入れたお墓

【展示に登場する青銅器】

● 銅矛（どうほこ）

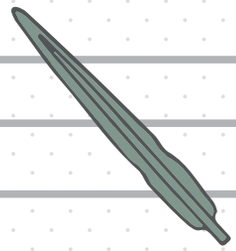
長い柄を差し込んでやりのようにつかう武器

● 銅戈（どうか）



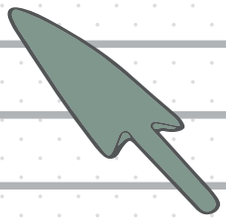
鎌のように刃を、柄に対して直角もしくは鈍角につけてつかう武器

● 銅剣（どうけん）



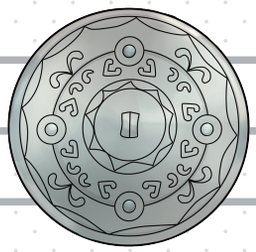
突き刺してつかう武器

● 銅鏃（どうぞく）



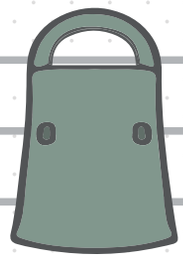
矢の先につける青銅製の矢じり

● 銅鏡（どうきょう）



平らな面が表で、裏面にはヒモを通す穴を持つつまみ（鈕）や模様がある

● 小銅鐸（しょうどうたく）

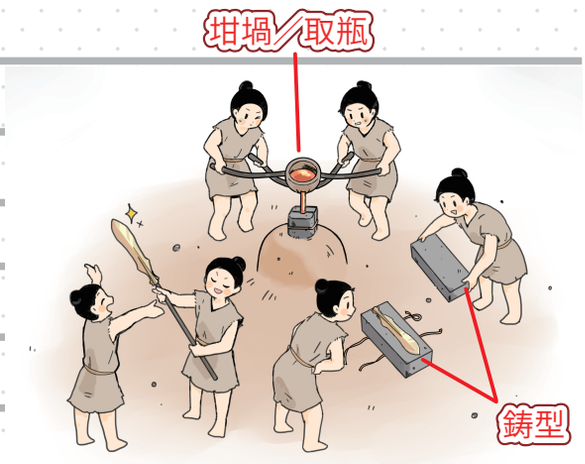


鐘や鈴のような小型の銅鐸

【青銅器関連の遺物たち】

● 中型（中子）（なかご）

鋳型の空洞部分をつくるためのもので、土や砂製の鋳型



● 坩堝／取瓶（るつぼ／とりべ）

金属を溶かすための器を坩堝、溶けた金属をすくい、鋳型に流し込むための器を取瓶といいます（弥生時代に両者の違いがあったのかは分かりません）

● 銅滓（どうさい）　溶けた青銅が鋳型からこぼれおちたり、はみ出たりしたもの